

## 宿善（一）

甲「私はもう長い間聞かしていただきました。しかし聞く時はたいへんにありがたくうれいのですが、家に帰るとまた愚痴やら腹立ちやらで、まことに何とも申しようもございません。いったいどうしたのでしょうか。いつまでもこれではいけない。どうしたらもつとはつきり生きることができるのでございませうか。」

乙「先刻からの詳しいお話によって、よくわかりました。それではいつまでたつても、同じことをくり返しているばかりになります。一つ根本的に考えかえてゆきませう。」

甲「どんなに考えたらいいのでございませうか。」

乙「すべて私たちに与えられた問題は、この『我』を解くことであります。私自身を、正しく解釈し解決することです。それなのに、この我をほっておいて、あらぬ所へ眼をそそいでいるのです。そこに座っておいでるその『あなた』の全体はいつたい何なのでしょうか。あなたは今何歳になりましたか………ああそうですか。四十五歳ですか。私は三十八歳になりました。その四十五歳のあなたと三十八歳の私とが、今ここに対座して、み仏の世界を語りあっています。まだ見ぬ先から、あなたは私を待つていてくださいました。そしてこのたびこそ生死の一大事を解決しなければと燃えていられます。考えてごらんなさい。あなたの四十五年のご生活、私の三十八年の生活、その長い間の生活の中途でただの十分間のできごとでもが、もし変わったことがおきていたら、今日こうしてお会いしてはいないはず。」

甲「えっ！………」

乙「私は、あなたにお出会いしたことをでも、不思議に思っています。なんらの予定していたことではなくて、ここに来て偶然にお会いしたのですが、その中にお会いしなければおれない必然のものが流れていたのではありますまいか。偶然と必然との一致が感ぜられた時、ありがたいという感激があるのです。」

甲「私は△△さんから先生のお話しを聞いた時から、この方よりほかに私の大問題をご解決くださる方はないと信じていました。今日お会いしたことをどれだけ喜んでいられるかわかりません。」

乙「まことに私は私の過去全体の生活一切をあげて、今日あなたにお会いしているのです。私はその宿善をよろこばずにはいられません。あなたもまた、あなたの宿善によつて、今日、それほどまでに、はりきった態度で、み法を聞こうと、私の前に出ていられるのです。宿善ほどありがたいものはありません。この広い街に、あなたがたった一人私の前に来ていられる。なぜ、この前の家の人はここに来ないのか。」

甲「考えて見ればありがたいことです。宿善ということがはじめてはつきり私の上の意味あわせていただきました。」

乙「そこでもつと考えて見てください。あなたは一人子を亡くせられました。天にも地にも、かけがえのない坊ちゃんを失われました。そのために悲歎し驚いて、法の

道に深入りをされだしたのです。その他にもいやなことつらいこともあったでしょう。」

甲「私は私の過去全体が全部死んでいると思っていました。希望も失せ、力もぬけ、いやな人生であり、失敗の一生だったと思っていました。」

乙「それならお聞きします。その一切のいやなことつらいこと悲しいこと、それらをぬきにして、今日私とお会いなさった喜びがあつたでしょうか。」

甲「それはありません。さつき仰せになりましたように、ただの一分一秒のでき事が違つていまして、今日お会いはいしてはいはずです。」

乙「私は何をあなたにお聞かせするのでもありません。ただみ仏の久遠の眞実をお伝えするよりほか、私とあなたの関係はありません。説く心も仏の心であり、聞く心も仏の心であります。助ける仏があなたに宿善を成就し、求道心をおこさせ、やがて合掌して三宝に帰依せしめるのです。そのままが助ける仏の心そのままの廻向です。仏にむかつて生きさせようとする仏の心以外に、仏にむかつて生きようとするとはありません。信ずる心、念ずる心こそ、仏の心そのままのあらわれでありませぬ。」

甲「先生！ 私は長い間、つまらぬごとを聞いていました。この私！ この私の全体をぬきにして、話の中にのみ仏をたずね、一時的な感情の中に仏をつかまえたつもりでいたのです。この罪業の全体が如来にはからわれていました。今の今、先生と対座して聞かしていただいているこの事実、ありがたいことでございます。私がこの私を感謝する以上、四十五年の生涯がなんで失敗でありましょう。」

乙「如来をほんとうに聞いた時、ピントがはつきり合つた時、いかなる罪業の一片だつて、いかなる悲しい出来事の一つだつて、失敗だの無益だのと、捨つべき所がありません。宿善まつとうじて如来の願心にふれた時、過去久遠の一切が生かされてくるのです。」

甲「私はいすまぬことでございます。いたずらに愚痴ばかり言っていました。たった一人の子どもを失いましたことは、依然として悲しいことでございます。しかしこの悲しいことも、もしなかつたら、み仏のみ教えにお会いするのではなかつたのです。悲しいことも悲しいままに、み法にお会いしたことを思えば、この一人子の死に導かれたのでございます。その他の一切がなくては今日の私はございませぬ。私を人生失敗の谷底から救つていただいたのは、まったくみ教えに会う宿善の尊さでありました。」

乙「これから後もまたいろいろなことが起こるでしょう。だが、み名の中に静かに、ありのままを背負わしていただきましょう。よしいかなることがおこりましようとも。超越の生活味は随順することよりほかからは生まれませぬ。人生は『苦』だと叫びつつも、涅槃のよろこびを不退に生ききられた釈尊のご生涯、愚禿と自らをいたみつつも、正定聚を自己の上に肯定された親鸞聖人のご信境をそのまま味あわせていただけるではありませんか。」

甲「まことにありがとうございます。長い間もがきました。そのはからいが一切を闇にしていたのです。合掌してありのままの中にみ名を生きさせていただきます。」

乙「一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名号と、ちゃんと一切があなたの上に成就されているではありませんか。どの一つがはつきりしても、あとの四つが具足されてあります。だが、いよいよこれからです。」

甲「これまでではありません。まことにこれからです。これから永劫に生ききらせていただきます。この赤ん坊をいつまでも導いてくださいませ。」